

IS shattered skies ~
その世界に宇宙は無
かった~

フットマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

各国は長距離弾道ミサイルを漸減的に規制し始めた。先進諸国は軍事力を増強し始めた。後進国の紛争は激化した。人々は治安の悪化に伴い長距離移動を自粛した。

世界はある種の、混乱した新時代を迎えようとしていた。

彼女達は未だ世界を知らない。

世界もまた、彼女達を知らない。

新しい世界の歪みは一人の天才によって、今ゆつくりと明らかにされようとしていた。

第1話

目次

1

第1話

「千冬ちゃん、実は折り入って頼みがあるんだ。」

そう手を合わせて頭を下げるのは、篠ノ之柳音師範の娘さんで：篠ノ之束とか言ったか。とても頭が良くて、ロボットか何かを作っていると云う話した。

ー正直に言つて苦手な人種である。そして馴れ馴れしい。

しかし篠ノ之神社、というより併設された篠ノ之道場には世話になっている身である。

ー私の様な、正直に言えば剣術しか取り柄の無い女に、何の頼みがあるのかと思うが、何か力仕事でもあるのだろうか。

中学校生活を掛けたJ・r・インハイが、3位入賞に終わつて色々と燃え尽き掛けている事もあり、私は渋々ながら了承した。

彼女に案内されたのは神社の裏手、御神体である山の麓に掛けて建てられた、大き目の納屋と言うか倉庫の様な建物だった。

ーやはり何某かの力仕事だろう。

と当たりを付けていると、彼女は驚くほど複雑で多重の鍵を手際良く解除していく。

「何か文化財の類でもあるのかも知れない。

古い神社であるからそう言う事もあるだろう。私が柄にも無くワクワクしていると、彼女が振り返って言うには。

「この中で見た物は絶対に、ぜえつたいに外で話しちゃダメだからね。」

「何か郷土史を揺るがす様な歴史史料でも有るのだろうか。

子供っぽく念を押してくるので、急かす意味も込めて頷く。

彼女は丁度全ての鍵を解除し終わったらしく、顔を真っ赤にして力みながら門扉を引いているが、殆ど動いていない。私は力仕事担当として彼女の代わりに門扉を引き開けてやった。

薄闇の中、最初鼻をついたのは油の匂いだった。慣れているのだろう、束が手探りで明かりをつけると、表れたのは横倒しなので分かりづらいが2〜3m程の人型の機械だった。

「私は単にパワードスーツって呼んでる。」

ボソボソと聞き取りづらいそれはこのヒトガタの説明であるようだった。

「元々は大気圏外活動用の動力付き宇宙服を作ろうとしてただけど気密も動力もサイズも重さも問題が出てあと製造機材とノウハウも材料もないから……」

そこまで一息で言い切ってから、さらに早口で聞き取り難く、何事か話し続けた。

取り敢えず、分かった事だけまとめると、

- 1、このヒトガタは所謂。パワードスーツ*（以下PS）である。
- 2、開発にあたって、テストパイロットをして欲しい。
- 3、これの特許料？か何かで本命の宇宙用PSを作りたい。
という事らしい。

丁度、私は筋肉が付きにくい体質だったらしく、剣術にも底が見え始めていた事もある。ただ何よりも。

ーテストパイロット、実にカッコイイ響きだ。

私はPSが売れたら、バイト代を出させる約束だけして、気軽にこの仕事を引き受けた。

だがこの時、世界は既に変わり始めていたのだ